

臺灣視察談

後 藤 新 平

明治聖徳記念學會から臺灣の話をやと云ふ仰せもありました。臺灣のことは明治聖代の出來事中最も重大なるものでありまして、幸にして私は兒玉閣下の下に、其經營に従事すること殆ど十年、縱令其職に在つても無くつても此事に就て御話致すことは、何れの場合に於ても辭退すべからざる義務を有つて居ると考へて居るのであります。旁々容易に御受けしざしたけれども、別に良い材料を有つて居る譯でもありません、勿論さう云ふ御考へて御招きになつたことでもないと思ひますので御斷りするまでもないと思ひますけれども、一應申上げて置きます。殊に唯今加藤博士から實に意味該博、趣味津津たる御話がありました後ちに凡俗の御話をするのでありますから、是亦諸君の欠伸を催されることになるかと思ひますけれども、それ等のことに無頓着に御話したいと思ひます。臺灣に就ては御話することは材料の善き惡しきに拘らず澤山あります。併し紙屑籠、塵溜の中から何かを見出すと云ふことは、今晚列席の御方々のやうな知識階級に在る人の固有の力に待つ方が宜いのであります。強ち話の上手下手、材料の善い悪いばかりでは無い、是は材料が悪からうが善い材料にしたい、下手な話を上手に聽いて其

利益を擧げると云ふことを御願ひすることが、最も今夕御臨席の御方に對して適當なことであつて敬意を失する所以でなからうと考へて、私は謹んで御話致すのであります。

色々ありますけれども極最近に視て來たことを申し上げたいと思ひます。此度は申す迄もなく臺灣の二十年に當る共進會でありました。他の語を以て申しますと、二十年間の總勘定である。斯う云ふことに相成ります。此御招きに應じて參りました時から私の有つて居る考を申上げることが最も必要である、どう云ふ譯で此招きに應じたか、舊知己のある所であるから御馳走もし、歓迎もするであらうと云ふことが樂しみてあつたか、或は唯知己に會ひたいと云ふことが樂しみてあつたかと云ふことに就て一言致します。私の公生涯に於ける所の知友の地と申しましたならば第一に臺灣を數へなければならぬ、それと公生涯の知友の地でありまして、之に遊んで其教へを受けると云ふことが私の最も熱心に希望する所である。況や此二十年間の總勘定の勘定書の陳列してあるのと共に之を併せて實際を見ましたならば、教へを受ける所甚だ多からう、既に臺灣を去つて十有餘年に相成るのであります、十年間公生涯を送つた所の庭園に對して或は改善し、或は改惡し、是等の得失に就て今や利害關係から離れて其跡を見ましたならば、自から其教へを受ける所が少なからぬと考へたのであります。斯様な見地から行つて見ました所の大體を申上げやうと思ひますが、之を一口に申しますと二十年間と申しましたが、恐くは是は兒玉總督時代の經營にかゝるものが多い、私職を去つてから七年目に行つたのであります。又此度五年

目に行つたのでありますけれども、七年目に行つた時は一尺の物であるなら二寸位出来て居りました。經綸の尺度を圖つて言ふなら一尺になるべき物が三寸位であつた、此度は五年目で參りました所が非常に進歩致しまして、殆ど九寸位までになつて居る、是は有形的の事であります。之を見ますと、臺灣のことは物的開拓の成功は心的開拓の成功に比すれば最も著しく進歩して居る。斯う申上げて宜しい。若しそれ心的開拓の點に就ては未だ豫期の點に達しないと云ふのが甚だ多い、斯う云ふことになります。

所て此處で御斷り申して置かなければならぬのは心的即ち精神的の無形のことになりますと云ふと固より容易に言ふことは出来ぬのでありますけれども、多くの人は教育、同化、斯う云ふことに持つて行くのであります。そこで學齡兒童がどうか、同化がどうかと云ふことを頻りに言ひます、學齡兒童を計算して見ると、三百二十萬の所に於て殆ど八十萬あります。而して其學齡兒童を就學せしめた所の統計などを見ると年々殖へて居ります。之を以て直ちに心的開拓の成功と云ふことは言へない、此點は餘程注意して御聽きを願ひたいと私は思つてあります。世の中に教育の誤解、同化の誤解と云ふものがあります、我帝國の拓殖事業と云ひますか、帝國主義の實行と云ひますかに對して、甚だ不利益なる施設を見るに至るので、どうも此教育、同化などに就て誤解のないやうにしたいと考へて居る。其點から見まして、心的開拓の成功は豫期に達しないと云ふのであります。極平たく心的開拓と云ふ中の主なものを擧げて申しますと、母國及母國人に對することは土人の尊敬歸依感化の程度如何、斯う云ふ所

て心的開拓と云ふことの意味を申述べるのであります。其點に就ては甚だ遺憾な所が多い、斯う云ふことを申上げるのであります。

それで内地から言つて見ますと、甚だ臺灣の施設は贅澤である、斯う云ふことも言へます、又此中には臺灣に御出でになつた御方も大分ありませう、當時臺北に同じく住んで、あの臺灣の今日に至らざる時代に其苦痛を嘗められた伊崎閣下の如きも此處に御出でになります。其他私の記憶に存せざる御方で臺灣に御出でになつた方もあるでありませうが、其臺灣が當時に於て私の施設に就て議論はあつたのであります。今日其施設の當否を見たいと云ふ考へて行きました、形體上のことは勿論進歩して居る。

私共は單に之を形體の上から見て申したならば大變に愉快で、ア、是れだけになつたかと云ふ感を起すのであります。内地などで見られないものをちよつと舉げて申しますと、第一雨が降つて道を歩いて靴を拭かずに敷物の敷いてある座敷に上つても何とも差支へがない、又市場へ行つて見ますと伯林に於ける市場に少しも譲らない立派な市場が出来て居ります。水道、下水、是も内地に比較しますと、單に臺北のみならず、今日は臺南にも、臺中にも今建設中であります。加之らず淡水にあれ、又基隆にあれ、是は軍隊の御方は皆御承知であります、軍隊衛生の上に如何なる變化を起したかと云ふことに就ては非常なる効果を擧げて居るのであります。近く臺灣に於て生蕃討伐の爲に蕃地より持ち來つた所の麻拉利亞は少ない、臺北に於ても麻拉利亞研究の爲に醫者が行つても直ぐに其麻拉利亞の顔を見ることが出

來ないと云ふ程まで進んで居ります。又他の話になりますが、下水などの如きに就ても、市場の如きに於ても、是から相當な地方に擴つて行くやうになつて、今や五百戸以上の所で下水の無い所はない、今日では三百戸以上の所にも皆下水が出來た、是はどうして出來たかと云ふと公共衛生費なるものが市場から入る。市場の個人の所有を許すやうになつたから是から入る金額は約を八十萬であります。それであるから黒死病の本家であつたけれども、却つて日本の方に黒死病を残して、其本家の方はそれを絶やすことが出來たと云ふのも其結果であります。又水源地の如きに至つても文明的施設に於て缺ける所がないやうに出來て居る。次には病院です。病院は私が藪醫者であつた爲に道樂に拵へた、大變評判を受けたのであります。是は後ちに今日申上げる所の主なる條項の一つになるのでありますから、其時に精しく理由は申しますけれども、其病院は最初から内地に在る所の病院と比較して見ると全く施設を異にし、又有力なる學者を招聘し、内地に歸つて療治をするよりも臺灣で療治をして死んだ方が宜いと云ふ觀念を第一に與へなければならぬと云ふことが其根本の精神であります。病院を綺麗に造つて贅澤にしようとして云ふ有形的精神にはあらずして、此土地に眞に骨を埋めると云ふ考を起させなければならぬ、靴を持つて取除無盡を取りに行くやうな考へが母國人にあつてはいかぬ。必しも役人のみではない、有ゆる人民にあつても行かぬのであるから其觀念を奪はなければならぬと云ふので完全なる病院を建てたのであります。今日になりますと漸く各地に病院が建築されると云ふことになりましたが、其中に臺北

の病院を以つて最も理想的なものを拵へたいと云ふ考へから、私の職を去る時分に繼續年限で出したものが半分は出來上がりました。

其病院のことに就て少し横道になります、私は年來どうしたら雪隠が綺麗になるだらうと云ふことを考へて之を圓く拵へたら宜からうと考へた、長いこと考へた、さうすると明治三十五年に私が亞米利加を経て歐羅巴に行く時に新渡戸稻造君と一緒に、其船の中でウエルアンシスベーションと云ふ本を讀んだが、其中に色々書いてあつて道路がどうなつて、下水がどうなつて、建築がどうなると云ふ考への中に私の考へと同じことが書いてある。そこで家を圓く拵へて唧筒で水を掛けて機械を拵へてぐ／＼廻はすやうにする。それから拭くとすつかり拭けるやうになつて来る。是が即ち健康状態を保つ所の眞の家屋建築法の進歩であると云ふことが書いてある。實に掌を打つて悦んだ、自分も考へなければども斯様に能く人の頭腦に入るやうに書くことは出來ぬ、是は秩序ある教育を受けた者、文學思想の有る者と無い者との差であらうかと一方には歎息したのであります。其後になつて前の病院のことに就ても深く研究をして皆に協議をして置いたが、是は衛生課長の高木醫學博士——今は病院長をして居りますが、それ等が能く私の意思を繼いでやつて呉れた爲に成功して居るのもありませんが、今度の病院は下の方が五寸ばかりの所は陶器で出來て居ります。掃除が誠に能く出来る。加之衛生上暑い所を涼しくして住まふと云ふことは非常に困難である。涼しい所を暖くして住まふと云ふことは容易である。

是は年來問題になつて居る所である。之をどうかすることにしたいと云ふので尙研究をしましたが、矢張り和蘭のやうに總督府は内地の山に持つて行つて拵へて、さうして養生旁々其處に行つて事務を執るより外はない、斯う云ふことになると、矢張り和蘭あたりでも總督一人行つたのてはいかないから、それに對するそれ〴〵の官吏も皆必要なものは住居を變へなければならぬ、さうすると阿里山の五六千尺から八千尺以上の所に持つて行くことになるが、是は大變な話で、唯病院だけ置くことは宜いだらうが餘程困るだらうと云ふことで屢々考へたのであります。然るに今度其病院には下にコールドストレーを拵へて、さうして外科手術の部屋だけは温度が八十度位低くするやうに、冷い風を煽風器で送るやうになつて居ります。それであるから、夜中でもどんな時でも手術をして醫者が汗を拭きつゝやることもなければ、看護婦も又患者も誠に酷暑の時に涼しい所で治療が出来るのであります。斯様なことが出来たと云ふことを以つて之を贅澤と見るか、又は心的開拓の精神を貫徹する所の物的の施設と見るかと云ふことが問題である。今度も澤山の有力なる御方が御出でになりましたから其邊に就ては如何に御覽になるかと云ふことを、私は他人の判断に待ちたいと思ふのであります。

それは先づさう云ふものがあると云ふことだけを申上げて置くのであります。是から物的開拓は成功して居るが精神的、即ち心的開拓の方に遺憾が多いと云ふことを申し述べますと、何か私が元彼所に就職して居つて去つた後の施設を悪く言ふか、或は遺憾に言ふかと云ふことに聞へるかも知れませぬ、

此席の御方はさう云ふ風に御聴きにならぬかも知れぬが、中にはさう云ふことを考へざるを得ないことになります。現に新聞紙などの淺薄なる批評の中にはそれに似やはしきことが往々散見して居るのであります。拓殖經營などは其人の根氣次第で分る。上根の者は上根の觀察が出来るが、下根の者は下根の觀察しか出来ないのでありますから、強ち私は此批評した人を悪く申すのではない、唯我帝國の拓殖事業と云ふ前途に大なる責任を有つて居る點から此處に鄙見を申し述べて見たい、又臺灣經營の精神のある所を申し述べて見たい。

物的關係、即ち有形的施設並に有形的進歩と云ふものが是も従前の計畫から來たものだ、従前の計畫から來たものだと云ふことが一部は名譽でありますが、一部は唯斯う云ふ派出なものが出来たのだ、斯う云ふやうに考へて居る。是は精神的開拓に成功する所の手段として拵へた所の有形的施設の宏大なるものを以て、唯後ちに形のあるものばかり施設し來つて其精神が抜けて來た爲に今度は心的開拓の本義を忘れて仕舞ふと云ふことになつて、實は主客顛倒で大に弊害を見ることであらう、此事に於ては諸君の御判断を煩はしたい、斯う云ふことになるのであります。其事を今日御話しまして明治聖代の拓殖事業の經營の精神と云ふものを發揮して置きたい。斯う云ふことになるのであります。

一體本國よりは氣候其他に於て苦痛の多い所に行つて成功すると云ふことは困難であります。唯臺灣は瘴癘の地、又野蠻蒙昧の地であるから阿片吸引の癖もあるし、旁々之を割讓しても統治に困難をなさ

るであらうと云ふことを李鴻章が伊藤公爵に向つて言ふたが、私は臺灣の統治困難だといふ譯ではない、それはそれとしました所が、一體日本帝國の氣候が好過ぎるのです、金利が高いのと又日本人に宗教心がないのと——宗教心がないと言つたら、或は語弊があるかも知れませぬが、拓殖上の效用を全ふするだけの宗教の力がない、斯う云ふ意味で言ふのであります。尤て宗教心がないとは私は言はない、是等の缺點は悉く臺灣拓殖の效を全ふするに困難である。それで臺灣を占領した時に恰も日本人はスバルタ人の如きものであらうと云ふ批評があつて、遂に臺灣を一億圓で賣らうと言つたのであります。今尙記憶に存して居るではないか、即ちスバルタ人は戦争の勝利者にして統治の失敗者なりと云ふことの轍を踏む者は日本人である、此事は必しも日本人自ら氣を揉んで一億圓で賣らうと云ふことを新聞に書いたのと一致致して居ると云ふのではなくして、多く外國人の話から起つて居るのであります。外國人の非難はあつたのであります。然るに之に反して稍々臺灣統治の效を見るに至つては白人の嫉妬と云ふか、中傷と云ふか、猜疑と云ふかが非常に増して來たと云ふことは事實である。必しも今日の獨逸皇帝に向つて嫉妬のあるばかりではなく、吾々日本人は白人からのみならず黄色人の仲間からも大嫉妬を受ける運命になつたのであります。是は幸か不幸かは別であるが、其影響は甚しいものであつて、遂に滿洲占領となり、又朝鮮併合となるに至つて甚だしくなつたのであります。而して其影響は日米戦争の原因を説明するに足るべき勢ひになつて來たのであります。必しも日米戦争が起るか起らんかは別であります

けれども、皆其嫉妬猜疑から起つて世界を震動せしむるやうな事になつて來たのであります。其主なる原因は阿片、樟腦、砂糖、此三つの臺灣に於ける成功が占領したのであります。日本人が最初臺灣を統治するに當つて、前申し述べましたやうに宗教、資本、本國と新版圖との氣候關係、此點に於て有利なる物が先づない、斯う云ふことが大體であります。

一方には臺灣の今日を致した所の順序を言ふと、第一に阿片、第三に樟腦、第三に鹽、第四に煙草の專賣、此四つの專賣の外に米、砂糖の改良、是が今日の臺灣の物的關係の進歩を爲すべき原因を爲したものである、而して之を簡單に證明致しますと、兒玉總督が任に赴いた時は前年度が七百萬圓の豫算で、四百五十萬圓の歳入しかなかつた、今日に於ては殆ど七千五百萬圓近き歳入を見るのであります。前年の豫算は五千五百萬圓の國庫歳入でありまして、八百萬圓の地方税が六千三百萬圓になつた、其通りであると假定して自然增收などを見込まんで置きましても、來年は著しきものは二百萬ピクルの砂糖の收入がありますと、此税の收入が約七千五百萬圓になるのであります。斯様な收入があると、又一方には先刻申しましたやうに公共衛生費などの歳入が八十萬圓も這入るのでありますから、衛生施設などが十分に出來て變化が起つて來た、此中には御承知の御方もありませうが、握飯を出して置くのと海苔卷の鮎かと思ふ程に蠅が眞黒に寄つて來る、夜などは口の中に蚊が入つて吐き出さなければならぬと云ふ始末の所が、今では殆ど内地と變らないと云ふまで變化したのであります。此事を此度臺灣に來た所の新

聞記者に高木醫學博士が話してやつたところが、彼等は高木といふ男は温厚な人であるけれども好い加減な法螺を言ふ人だと言つた。其位變化を起したのであります。斯様なることは有形的に皆變化を起して來たのであります。其元は歳入にある。第一の歳入は阿片專賣の歳入、それがなかつたら樟腦の專賣と云ふものは起らない、然らざれば樟腦專賣を實行すると云ふ提案を政府並に其他の者が今日許容しない、此樟腦專賣が成功したから鹽の專賣も出來た、次に煙草の專賣も或は政府の專賣前に計畫したのであります。政府が專賣にするから臺灣總督府の方は待つて呉れと云ふので一緒に實行したのである。其初は阿片專賣の成功から起つたものである、此阿片專賣を云ふことに就て今晚話をしまして、其他のことは中々時が費へますから申上げることが出來ませぬ。

阿片專賣と云ふことに就ては帝國大學の大部分の人は反對であつた。又政府の大部分の人も大反對であつた。阿片嚴禁説であつた。是は不意なことでありまして、私が臺灣の民政長官になつた譯も是から起る。其當時阿片問題と云ふものは中々朝野の問題であつた、即ち臺灣領有の爲に、若し阿片制度に躊躇したらマルで日本國中阿片の煙で巻くやうになるから之を嚴禁しなければならぬと云ふ議論であつた、所が私はさう考へない、私も實は阿片のことは澤山知つて居る譯ではない、經驗のある譯でもなかつたけれども、先年長崎に於ける阿片騒動と云ふものがあつて段々調べて見ると、皆が思つて居るやうに一遍管ると砂糖を管めるやうに直きに管めたくなつて來るものでもない、之を喫み習ふと恰も酒を飲み

習ふやうな譯で次第に慣習が付くものである。何處で慣習が付くかと云ふと、矢張り遊女場、博打場と云ふやうな所で段々に慣習が付いて來るのてあります。唯知らぬ中に慣習が出來た者はどうかと云ふと、子供が咳をしたり、泣いたりして其場合に阿片の煙を子供に吹き掛ける、度々やられますと遂に阿片の慣習に陥る、さう云ふものが稀にあつて、其他は皆遊女場とか、博打場とか云ふやうな所で慣習が付くのである。斯う云ふことを曾て聞いて居つたが、此事に就いて急に之を嚴禁すると云ふことは帝國の今日の新版圖統治の上に宜しくないかと云ふ考へを有つて居つた、況や四百餘州を蹂躪すると云ふ其時の説であつて支那全土を取ると云ふ勢ひになつたのですから、其志の大なるのと其志の小なるのと甚だ調和を缺いて居ると云ふ考を有つて居る。一日内務省の食堂に於て野村内務大臣が居られて食事の濟んだ後に色々雑談をした、阿片嚴禁のことに就て議論があつた、其時私は黙つて居つたのであります。内務大臣が言はれるには、どうも今日は阿片のことに就て後藤が黙つて居るではないかと云ふから、私はこんな分らぬ阿片論をする者と一緒に話すやうな説は有つて居らぬ、私のはもつと貴いから此處で話す譯に參らぬと言つた。さうするとそんなことを言はずに少しばかり話したらどうですと云ふので、そこで其當時私は話した、臺灣人に阿片を吸ふ者が何人ゐるかと云ふたら、何人と答る人が此處に一人も居るまい、阿片を吸ふと云ふ苦痛はどんなものであつて犯罪的に來るものであるか、來ないものであるかと問ふたならば、之を止めて居ると犯罪的にも來るものであると云ふことを答へる人はないであらう、且

又急に嗜好品を嚴禁して成功したと云ふことは何れの政府に於てもない、是は今度の露西亞でウオッカを禁じたのを以つて見ると、此私の立論は今後或は如何様になるかも知れぬけれども、是は驚くべき成功をして居る。是は別段として急に嚴禁しても甚だ反動の大なるものであるからいけない、私の思ふ所は三百萬の中三十萬位存して居る、其三十萬の中十五萬と云ふものは止めることの出来ないやうな慣習になつて居るだらう、嚴禁したら犯罪人として捕はれる者が十五萬の中、少なくとも五萬人ある、牢屋がないからと云つて寛大にしても三萬人は捕はれるであらう、斯様な急激なことをして捉へた時に、是が惡人なら宜いけれども、相當身分のある者がある、それ等の者を縛つて、それで統治が出来るかどうか、萬一それに對して牢屋破りを拵へて謀叛するやうなことになつたらどうしても一師團を有つて行つてもやりきれぬことになるが、其覺悟はどうか、一體意見が有るか無いかそんなことで四百餘州を取ると云ふ食堂の話はどうしても信ずる能はざる所である、斯う云ふ話をした。況や宗教に何の頼む所なくして殖民政策をやると云ふことは、日本帝國に於ては何等の考へか別になければならぬ、其代りに何を以つてするか、直ちに大和魂を引出してそれで以て出来るかどうかと云ふことは、餘程考へなければならぬ、どうするか、之に代はるべきものはどうするのであるか、宗教其物と云ふものは自分の考には人心の弱點に乗ずるにある、乗ずると云ふか、或は弱點を補ふものであるか、其處にある、又行政の秘訣も人心の弱點を補ふにある。此に於て弱點を補はずして弱點を押へて却て激せしめると云ふやうなこ

とをして新版圖の統治が出来るかと云ふことは、頗る私の取らぬ所であり、又今日の行政は生物學の原則の上に置くと云ふことが新しき主義であると云ふことが間違ひがないものとしたならば、此慣習を俄に變へさせると云ふことは出来ぬ、そんな政治をする考へはどうか、それでなければ此解決は出来ないかと云ふことを話した。まあ皆が黙つて居つたが、さうすると私が局へ歸つて來ると外務大臣から呼びに來た、先刻の話は面白い話である、もう少し何か意見があるかと言ふので、私は阿片を專賣にして、其專賣で以て慈善衛生の方法を拵へて、さうして精神的感化を衛生的施設の力を以て官吏、内地人、内地土人、是等を感化すると云ふことに使はなければならぬ、俄にも寺を拵へた所が、本願寺にした所が、又耶穌教の寺にした所が、さう云ふことは出来ぬから、どうしてもそれより外に仕方がないと思ふ、此事は先刻申上げなかつたけれども、人心の弱點に乗ずると云ふことは今醫者を拵へて、さうして之に依つて初めて新文明の感化を及ぼすと云ふことにするが一番宜い、皆それから十分出来る、斯う言ひました。そこで然らばそれを書いて見ないかと云ふので、それから私は書いて持つて行つた所が、それを臺灣事務局と云ふものがあつて、其總裁は伊藤公爵であつた、各大臣が皆其意見であつた。行つて話した所が、諸君は御承知でありませうが、平野君、又今生きて居る渡邊國武君、是等は一方は遞信大臣、一方は大藏大臣であつたが、其人達が反對の張本者であつた、所が或る時平野君の所へ行きました所が、一體さう云ふことを言つて冗談半分に人をからかつたのだから分らないけれども、いや君を呼びにやらう

と思つて居つた、君は内務省の委任高等官中の秀逸なる人て國家に貢獻する所大なるものであらうと考へるが、如何なることをしても取返しのつかぬことをしたるが、僕は君に向つて忠告をしようと思ふ、斯う云ふのです。私は何のことだか分らない、そこで聞いた所が今の阿片の建議書のことです。あれは直ぐ取消さなければならぬと云ふ議論であつた、それから渡邊國武君からもさう云ふ話を聞いたのだからそれが元であつて、遂に臺灣事務局で決定せられて、今尙其書類は存して居るが、後藤衛生局長の第二の意見を採用候條此段及通知候」と云ふ書類を樺山總督にやつたのが阿片制度の初めてあります。第一の原案は直ちに嚴禁する、第二は漸次に嚴禁するので、今實行して居る通りのものです。そこで私は其時に言つた、日本の刑法を改正しなければならぬ、日本の刑法と云ふものは病人の爲に阿片を用ゐることとは許してある、阿片煙を吸入することは許さないと云ふのが日本の刑法にあるが、醫藥用としては何等の差支へはない、斯う云ふ私の解釋であります、若し阿片煙を嚴禁すると云ふことが刑法にあるに拘らず、臺灣に許した爲に日本人が阿片を吸ふて東京の奴が阿片煙に卷かれるやうな日本人であつたならば、私は日本帝國と云ふものは將來生存競争の上に立つことが出来ないものであると思ふ、白人の如きは何れの國に行つても刑法にさう云ふことを定めては居らない、けれども品性の上から之を臺灣に許したからと言つて、さう崩れて仕舞ふやうな薄弱なもので今日以後生存競争の間に立つて母國人として新版圖を次第に征服して行くと云ふことは出来ない、さう云ふ不見識なことを以てやると云ふことはいか

ぬと云ふ話をした、之れに伊藤公が大に同意せられた、其元は即ち生物學的原則の上に遡つて行かなければならぬと云ふこと、慈善衛生のことを擴張して精神的征服の本にすると云ふことが初である、阿片に就ては既に左様な譯で、さうして病院の設立から何から精神的行動の根本を培養して行くことの方法を考究し、さうして拓殖事業の完成を期さうと云ふことが元であつた、其施設を助けるに有形的の諸般の物に及ぼすと云ふことになつたのであります。

所が其施設が段々成功して、先刻申しましたやうに七千萬圓の歳入までもあると云ふことになつた爲に、却つて害を醸すやうになつた、それは何であるかと云ふと二千五百萬圓と云ふ金を有つて生蕃征討の費用に供したと云ふことである、是が爲には軍隊を非常に痛めた、實は生蕃を十人殺して軍隊を一人殺しても掛合にならない、百人殺して一人殺しても、此名譽ある軍隊を之に掛けると云ふことは出来ないのである、是は伊崎閣下なども御承知になつて居るが、兒玉總督の時分には急激にやらない、軍隊は成るべく斯う云ふものに使はないと云ふのが根本の趣意であつたが、實は金り余が有り過ぎるからあんなものに使ふことになつたのである、所が今日では二千五百萬圓と云ふ金を有つて、行つて之に使つたら臺灣の町は立派になつたけれども、平地の富を山の上に入れて仕舞つた、そこで餘程窮迫して居るか
ら今度の新總督、新長官は是が爲に思はざる苦痛を感じるであらうと思はれる、それと一方に精神的感
化の爲に施設する所の有形的總ての關係を主客顛倒して物的關係の進歩を以つて得意とするやうになつ

て心的關係の進歩に注意を懈るやうになつて來た、逆運動をして非常に害を爲す、之を遣り直すと云ふことに就ては新總督、新長官の餘程の注意を促さなければならぬことになつた、併ながら今日では新總督、新長官より受ける所の新福音を得やうと云ふところが不安の餘りに、一同の希望であるから、此人望に依つて之を全うする所の幸福なる信念を興へるであらうと云ふことを希望して、此希望して居ることが實際はさう云ふ風になつて、平地の富を山の上に入れたと云ふことの爲に非常に困窮をするやうになつた、物的關係の進歩はしたと云ふけれども、甚だ氣遣はしい狀況である。

何を有つて私がさう云ふことを申すかと言つたら、臺灣に於て新土匪が起つたことは皆さん御承知の通りであるが、此新土匪と云ふものが千人以上縛らなければならぬことであつたが、其起る日まで内地人は官吏であると官吏でないを問はず少しも之を知らなかつた。此に於て母國人に對する尊敬、母國に對する歸依感化と云ふものが従前よりも進んで居るか又は退いて居るかと言ふことの判斷を下さなければならぬのであります。あれだけの内地人が居つて少しも知らなかつた、是は精神的感化の所に力を用ひないで、有形的のことに趨つた所の罰であると言つたら少し語弊があるかも知れぬけれども、反動であると言つたら宜からう、是は餘程注意して行かなければならぬ、是は最初から宗教關係のない國であつて、さうして拓殖事業を盛んにして今日の文化政策の普及を以て帝國主義を實行して行くこと云ふことに就ては、餘程注意しなければならぬ、此事の分つて居る人はどれだけあるかと思ふと、最初の施設の

時から今日に至るまでの経過の分つて居る人は甚だ少ない、臺灣の官吏でも其邊のことは考へて居ない、他の有形的の機械的の仕事をして臺灣の拓殖をしようとする云ふ考へである、今日の拓殖事業と云ふものは有機的でなければならぬ、有機的關係に於ても、物的關係の仕事をするにしても、始終心靈の開拓に意を用ゐなければならぬ、況や最初の考へは人工的の施設を全ふする爲に諸般の物的關係の施設をしたものである、その分らぬ奴が寄つてどうだと云ふことを言つて居つた、それに言ひ負かされて、遂には心的關係の注意を怠るやうになつて、此禍を買ふことになつては甚だ恨み多しと言はなければならぬから、どうか此邊に就ては他日の成功を切に希望しなければならぬと云ふ老婆心よりして、此處に赤裸々の御話をして置くのであります。其事柄は既に阿片制度の起つた理由から阿片制度を實行した所の事柄に於て分つて居る、況や其事の實行と慈善衛生の實行とを以て、初めて新版圖の民も恩澤に浴し、又母國人も恩澤に浴して、取除無盡を取りに行くやうな考へてなく、彼所に行かなければならぬと云ふことが主眼であつて、今日に於ても何處の墓場に行つて見ても死體の埋つて居る處はない、其處に乃木大將が深く考へがあられたか無かつたか分らぬけれども、私は深い考へがあるとした方が宜いと思ふが、あの親孝行の人が其處に母の死體を埋めたと云ふことは、私は拓殖地に於ける心的開拓の上に非常なる効果のあるべきものであると思ふ、さうして人に感化を與ふることを爲すものなきが故に、是が無益なることになつて居ると云ふことは惜しむべきことである。髮毛一本ない、唯石位立つて居るけれども、

中には何も無い、骨は皆焼いて粉にして内地に持つて来て埋めると云ふことであつて、どうして是が帝國の版圖になりませうか、法律六十三號はいらぬとか文官制度にて宜しいとか同等の權利にするとか、何を言つて居るやら分らない、私は帝國の拓殖上の大なる誤解であると思ふ。又明治聖代の一大偉業の蹉跌を來すべき禍根を含んで居る——少し言ひ過ぎかも知れぬが此言は飾りなき言である。二十年間の總勘定が斯の如く見事に出來たにも拘らず、今後に於て重大なる注意を加へなければならぬ、明治の鴻業をして全ふせしめやうと思ふならば、此忠言は決して過言でない、私は斯様に考へて居るのであります。

今日支那の形勢は如何であるか、是は長くなり申すから申しませぬが、唯如何であるかと云ふことか
ら考へて見ると、臺灣の統治が効を奏して眞に物的關係でなく、心的關係の上に開拓の効を奏して居
ると居らざるとに依つては四百餘州四億の民を統御する——統御すると云ふのは悪いか知らぬが、是と共
同して亞細亞人のものとする、亞細亞人の根本主義を實行すると云ふことに就て策源地として成功すべ
き所のものを斯の如き心的關係に於て缺點あらしめて、而して今日の如く四百餘州を禍亂に陥れたなら
ば如何なる結果になるか、此點から考へても臺灣の統治と云ふことに就ては心的開拓に大いに注意を缺
いて來たと云ふことが、若し私の言ふ通りであるならば之に對して非常なる注意を拂はなければならぬ
と云ふことは明かである、縱令私の言ふことが若し其實に過ぎて居ると云ふことであつても先般の新土

匪の發動は如何なるものであつたかと云ふことを説明しなければならぬ、三百萬人の新附の民の中に一人も之を密告した者が無い、併し之を知らなかつたかと言へば知つて居るのである、それであるから私が高度彼地に旅行して着いた晩に言ふて居る、能く視なければ分らぬけれども、自分が臺灣を去る時に母國人と本島人との默契を鞏固にして行かなければならぬ、第三のゼネレーション、即ち一代を二十五年として七十五年に至るまでに成功をしなければならぬので、今日の此假の安寧を以て安心することは出来ない、未だ心的關係に於て足らない所があると云つた、其時に皆笑つて居つた。何を後藤が言ふかと言つて居つた。所が今日二十年前の臺灣に比して母國に歸依することの感化が如何になつたかと言つて、彼等の自覺心が起ると同時に却つて減少して來たと云ふ事實である、是は母國人として大に注意を拂はなければならぬ、又當局者にも責がある、是等臺灣三百萬人の者が何の爲に自分を歡迎するかと言つた、私は随分ひどいことを言ふ奴だと云ふ批難を受けた、一體何の爲に私を歡迎してこんなに來るか、今日は日本帝國の新政に左様に不服であるならば、是だけの統治が擧つたら皆支那に行つた方が宜いだらう、唯辭令を巧みにして歡迎など、言つて何をするのだ、斯う云ふことを言はれて不平があるならば何故に密告しなかつた、又どう云ふ譯で知らなかつたか此苦言を呈するのは一體お前達の爲に必要なことであつて、幸福なることであるや否やと云ふことはお前達が判斷するが宜い、自分でなければ此苦言を呈する者が無いと思ふから明々白々赤裸々に話すのであるから能く考へて此處に居つた者はか

りてなく、居らぬ奴にも話すが宜い、能く考へて見るが宜い、斯う云ふことを私が申した、けれども此事は三百萬人の人ばかりではないが、備はらぬことを三百萬人の人に求めると云ふて餘り苛酷だと云ふても、誠意に出たことであるから一向構はぬ、けれども母國人にも責むべき所甚だ多い。

之を要するに私は物的關係の施設を以て成功したることが吾々の精神であると云ふ誤解は須く吾々に責を引いても宜い、けれども明治聖代の殖民政策の精神が其處にあると云ふならば、吾々は國民の精神でなからうと思ふ、況や明治聖代に於ける明治天皇の殖民政策に就ては有ゆる殖民政策中の新殖民政策よりも尙一層誠意ある最上の文化的政策の普及を以て其本體と定められてあつたことは明かである。是は巧利主義の上から斯うすれば損、斯うすれば得と云ふ思召で出来たのでなく、自然に發したものを綜合して見ると、西洋に於ける所の殖民政策の新殖民政策よりも更に進歩した所の文化的政策に於て施される所の御政策であつたと云ふことは争ふべからざる所である。何故かと云ふに殖民政策其物は幾らか危険なる背景を有つて居る、そこでコロニヤルポリチックと云ふ語が面白くないと云ふので、近來はニユーコロニヤルポリチックと云ふ字を書いたものが段々ある、それは心的關係の開拓を元としてやつたので、それでもまだ面白くないと云ふので此節はクルツールポリチックと云ふ字を用ゐて居る文化政策と云ふことである、文化政策を普及すると云ふ點まで進んで居る、是は即ち西洋の巧利主義と云つても悪いかも知れぬけれども、利害關係を打算した風にも察せられるのであります。所が明治天皇の新版圖

統治の思召と云ふものは自然に其處に來て居る、是だけは事實である、所が此精神を普及することに就て必要なる物的の有形的の施設をしたものを主客顛倒すると云ふに至つては吾々は如何なることをも憚らず忠言を爲して、之に盡すと云ふことでなければならぬと思ふ、何故に本願寺は壯大な家を建てるか、唯錢を集める爲に壯大な家を建てたのではなからう、何故に羅馬のバチカンはある立派な物を捧へるかと云ふに、是は最初の考へに戻つて見たら全く心的開拓の本旨であつたに違ひないが、其物的關係を以て助けるに至つて順逆を過るに至つたのが今日彼等が宗教を禍する原因を爲して居りはせぬか、果して然らば吾々は拓殖政策の實行に就て此過ちを再びすると云ふことは最も恐るべきことであらうと考へます。

臺灣に再遊致しまして臺灣の知友が私に教へた所の一斑を諸君に申し上げます(完)

(文責記者)

